

熊本サンライズ LC の島です。
この慰霊碑は、1980年建立しました。

ホストクラブから慰霊祭の語り部をと指名がありましたので、簡単に当時の体験をお伝えしたいと思い引き受けました。

77年前の今日、私は此処から150メートル位先の水道町の真ん中、現朝日生命ビルの所の自宅におりました。

濟々費5年、当時健軍の三菱1091飛行機工場に学徒動員中でした。工場では名古屋からの熟練の年配工員の下で、市内の全中学校又宮崎の中学校の生徒も加えて、「月月火水木金金」で飛行機の製造に従事しておりました。

製造番号キー67、通称「飛龍」戦闘爆撃機です。

工場でも何度かグラマンの機銃掃射・爆弾攻撃に会いました。

あの日警報で一度自宅の防空壕に入ったのですが、爆撃が始まったのはまだ明るかった時間だったと思います。

横着に屋外に出たとき、南方の「千徳百貨店と松本馬車との間の道路」に一発、北署と西郷病院の間の電車通りに一発大型焼夷弾が落ちて、両側が一気に燃え上がりました。

熊本第一の高層建築「千徳」が、真っ赤に鉄骨の骨組みを見せて崩れ始め、県庁も北署も炎上し始め夜空を染めていきました。

既に、大江方面・新市街方面は本当に火の海でした。

消防車が一台、大甲橋を渡って大江に消えていったのが今でも目に残っております。

後どうなったんでしょう？

暗い夜空から、焼夷弾はザーザーと音を立てて落ちてきました。

雨も降ってきました。何の雨だったのでしょうか？

下通り側と水道町側には広い電车道があり、火砕流は炎上中の下通りに向かって流れており、延焼はしないと少々安堵しておりましたが、明け方大甲橋際の高い建物に火が付き、消火でできず遂に水道町側が炎上し角の電車市場、明円寺、江藤病院、ルーテル教会、そして遂に我が家も延焼しました。

カトリック教会、手取神社は無事でした。境内が広がったからでしょう。

防火員と一緒に消火に当たりましたが、防火用水もなくなり櫻井町の親戚(東京庵)に避難しましたが、そこも避難準備で老叔母を背負って千葉城に逃げました。

途中振り返って見れば、上通りは物凄い大きな火の子が下通り方面に流れ、大火災の火流の怖さを知りました。

火の子払いに人が水を掛けてくれましたがとても重くなって、時々叔母を下しました。

千葉城は老人子供の避難民で、一杯将校がきて怒鳴って狂態でした。

熊本城は、師団司令部があつたが被災なし？

夕方、上通りは延焼しなかつたので親戚の家に帰り、疲労困憊で何時間か寝込みました。我が家がないので、結局終戦まで寄留しました。

葵LCの国米ライオンの実家「司旅館」は、親戚「東京庵」の向い側で延焼なしでした。

今の白川公園にあつた県庁舎と北署、図書館、武徳殿、支那語学校は炎上しましたが、日赤本社(ジーンズ邸)、日赤病院、知事公舎、内務長公舎、警察本部長公舎、そして今ここにあつた職員公舎は無事でした。

延焼は水道町真ん中の荒木又衛門(葬儀屋)の所で止まつたので、又衛門が止めたんでしょう。

空襲のあとは健軍工場には行かなかつたです。学生がおらねば製造出来なかつたと思います。43機まで、造つたと思います。

終戦まで45日、焼け残りの家に人は集まるもので一日中無為徒食でした。マージャンも覚えました。

勿論、終戦の玉音放送も其処で、聞きました。

8月15日は、7月1日の大空襲の真っ赤な火空に比べ、真っ青な快晴でした
ポツダム宣言のピラが空を覆って、舞い降りてきたのは何日だったでしょうか？
(今、持っておればお宝でしょう)

中国軍が長崎に上陸するから女子供は田舎に避難せよ、の流言飛語にて、熊本駅は大混雑でした。(私は、まさか？と思い駅まで行ってみました)

昭和20年 誰もが、困窮の中、何とか生き延びてきました。

戦後の復興は、本当に早かつたです。区画整理後、見る見る町並みが出来、実家も竹瓦の食堂を建て、昭和末年まで現地で暮らしました。

77年余で、近くに空襲の痕跡は全く見当たりませんが、多くの死者と甚大な被災を二度と見る事のない様願うばかりです。

明治の初め、クラーク博士は「大志を抱け」と云い、新時代の発展に青年を送りました。

私の恩師鹿児島工専の梶島二郎先生は昭和23年春、荒廃した鹿児島市街を指さし、「落第はさせん。一日も早く社会に出てこの国を復興してくれ」と言われました。日本は見事に復興しました。

でもホーキング博士は、「人類は自分の知恵：人工頭脳で破滅する」と警告されました。

第三次世界大戦を危うく回避しましたが、若し次に大戦があれば空襲なんてのんびりしたものではありません。一瞬で壊滅でしょう。

人類は、絶対に争いなき世界を造るべきです。現状は果たして如何なるものか？

慰霊祭に鑑み、走馬灯のように、あの日あの時が臉に浮かびました。

終わります。

ご清聴ありがとうございました。

補足(それから)

2022.07.01

熊本サンライズの島です。

「熊本大空襲の記憶」はお読み頂ければ幸甚です。

本日は、「その後」を少し、お伝え致しましょう。

大空襲の後、人々は焼け残った家に入るか田舎に疎開して行きました。

私も、年取った叔母と幼い従妹を乳母車に乗せ、供合の学友の家まで弓削往還を通過して押して行きました、

帰りは貰った米をかついで渡鹿練兵場を横断してトコトコ帰りました。

終戦まで一か月半、バラックもポツポツ、まだ闇市も無かった。

動員もなく、登校もなく、虚脱・無為徒食の日々でした。その後大きな空襲はなかったです。

8月初め、6日にアメリカが新型爆弾を投下したとラジオで知りました。

次の空襲には必ず防空壕に入るようにと知らせがありました。

そして8月9日、金峰山の右手の青空にきのこ雲をはっきりと見ました。

長崎に投下された原爆第二発目でした。熊本では音もなく、振動もなく、静かでした。

8月10日、立田山を越えてグラマンの機銃掃射がありました。

操縦士の顔が見える程低空でしたが、我々には何も出来ませんでした。

最後の空襲でした。

その後、二、三日頃、警報もなく多くのビラがヒラヒラと落ちてきました。

8月15日、玉音放送を聴き戦争が終わったのです。

その日、空は真っ青な青空でした。

誰も浮かれることなく町は静かでした。

あとで知りましたが、日本が降伏し米軍が上陸して第一番にした仕事は、仁科研究所の「サイクロトン」の破壊です。

サイクロトンで原爆は出来ませんが、仁科先生の原子核の研究で、当時日本は世界的にトップを走っていたからでしょう。

原爆の恐ろしい威力を十分知っていたのです。そして2度も落したのです。

だが3度目はありません。

原爆だ、水爆だと実験はありますが、都市に落としたのは70年後の今までで初めてです。

宇宙に漂うこの小さな星「地球」が消滅するまで、人類は自ら破滅を救うには、温暖化も放射能も細菌もウイルスもきつと克服していく事を願います。

終ります